

2024 年度 卒業生アンケート結果 報告書

看護学科卒業 1・2 年目の卒業生を対象にアンケートを実施した。対象となった卒業生は、『2019 年度カリキュラム』（情報科学の時間数増加、「ボランティア論」「サービスマーケティング」等の選択科目を増設、国際的視野を強化（英国キングス・カレッジ、シンガポール大学、国立台湾大学等との交換留学制度）した教育を受けていた学生であった。

I. 調査内容

A. アンケート実施時期

2024 年 10 月～11 月 30 日。

B. 対象

看護学科卒業 1 年目（2020 年度入学：29 期生：55 名）・2 年目（2019 年度入学：28 期生：61 名）の計 116 名を対象とした。

卒業 1 年目（2023 年度卒）は 2020 年の入学時から、卒業 2 年目（2022 年度卒）は 2 年次から授業・演習・実習・学生生活全般にわたり、新型コロナウイルス感染拡大による影響を大きく受けた学生であった。

C. 方法

1. 調査方法

Google Form を用いた無記名 web 上アンケートを実施した。依頼方法は、看護学科キャリアサポートステーションおよび学年 LINE にて調査依頼とアンケート URL を配信した。

2. 調査項目

1) 属性：卒業年度、就業年数、現在の職種、雇用形態、勤務施設の種類、卒業後の進学の有無、進学先名、進学希望の有無

2) 「看護学科で涵養した DP1～8 の能力を就職先や進学先で活かすことができているか」：4 件法（1. まったく思わない、2. あまりそう思わない、3. まあそう思う、4. そう思う）、各 DP の回答理由：自由記載

3) 「看護学科で学んでよかったか」：4 件法（1. まったく思わない、2. あまりそう思わない、3. まあそう思う、4. そう思う）、回答理由：自由記載

4) 看護学科教育において「継続すべきこと」、「改善すべきこと」：自由記載

2. 結果

A. 回答者数と回答率

2022、2023 年度と比較し、全体の回答者数は概ね同様であったが、卒業 2 年目の回答率が上昇した反面、卒業 1 年目の回答率が低下した。

表 1. 年度別回答者数と回答率

2024年度 回答

	卒後1年 (29期)	卒後2年 (28期)	全体
卒業生数	55	61	116
回答数 (%)	9(16.4)	26(42.6)	35(30.2)

2023年度 回答

	卒後1年 (28期)	卒後2年 (27期)	全体
卒業生数	61	59	121
回答数 (%)	21(34.4)	19(32.2)	40(33.0)

2022年度 回答

	卒後1年 (27期)	卒後2年 (26期)	全体
卒業生数	59	61	120
回答数 (%)	18(30.5)	14(23.0)	32(26.7)

B. 回答者の特徴

表 2. 回答者の特徴

1) 卒業後看護職として働いた年数

	28期生		29期生	
1年以上2年未満	21	80.8%	1	11.1%
1年未満	2	7.7%	8	88.9%
看護職として働いていない	3	11.5%	0	0.0%

※1年未満：2名（助産師）

2) 現在の職種

	28期生		29期生	
看護師	21	80.8%	9	100.0%
保健師	2	7.7%	0	0.0%
助産師	2	7.7%	0	0.0%
養護教諭特別別科	0	0.0%	0	0.0%
大学院生(博士前期課程, 修士課程)	1	3.8%	0	0.0%
専攻科	0	0.0%	0	0.0%

3) 雇用形態

	28期生		29期生	
常勤	25	96.2%	9	100.0%
非常勤	0	0.0%	0	0.0%
学生	1	3.8%	0	0.0%

4) 所属施設の種類の種類

	28期生		29期生	
大学病院	20	76.9%	7	77.8%
総合病院など(入院設備あり)	5	19.2%	2	22.2%
訪問看護施設	0	0.0%	0	0.0%
大学	0	0.0%	0	0.0%
大学院	1	3.8%	0	0.0%

※大学院は助産学生

5) 卒業後の進学の有無と進学先

	28期生		29期生	
進学していない	22	84.6%	9	100.0%
進学した	4	15.4%	0	0.0%
	28期生		29期生	
金沢大学看護教諭特別科	1		0	
母子保健研修センター助産師学校	1		0	
東京都立大学助産学専攻科	1		0	
日本赤十字看護大学大学院	1		0	

6) 未進学者の進学希望

	28期生		29期生	
進学した	3	11.5%	0	0.0%
進学希望がある	3	11.5%	2	22.2%
進学希望はない	10	38.5%	3	33.3%
どちらともいえない	10	38.5%	4	44.4%

C. 看護学科で涵養した DP1～8 の能力を就職先や進学先で活かすことができているか

1. 4 件法（1. まったく思わない, 2. あまりそう思わない, 3. まあそう思う, 4. そう思う）による結果

1) 2024 年度評価

DP8 以外の全 DP において 29・28 期生の 80%程度以上が「そう思う」「まあそう思う」との肯定的な回答であった。DP6 は両卒年次ともに 100%の肯定的な回答で平均値も 3.6 と最も高かった。一方、DP 8 では、両卒年次ともに約 50%程度が「あまりそう思わない」「まったく思わない」と否定的な回答で、平均値も 2 台で低値であった。

卒業年次別にみると、28 期生が「そう思う」と回答した割合が 50%以上と高かったのは、DP6・5・7 であった。28 期生の全回答者が「そう思う」「まあそう思う」の肯定的評価であったのは、DP3・4・6 で、DP8 以外は 90%を超える肯定的評価であった。28 期生の卒後 1・2 年目の比較（Appendix A）では、DP 8 以外の肯定的評価の割合（90%以上）に大きな変化は見られなかった。しかし、卒後 1 年目に全 DP において「そう思う」との回答割合が高かった傾向が、「まあそう思う」という回答割合に移行する傾向がみられた。特に「そう思う」と「まあそう思う」割合の変化が 40%程度みられたのは、DP 3・4 であった。

29 期生が「そう思う」と回答した割合が 50%以上と高かったのは、DP 3・6 であった。29 期生の全回答者が「そう思う」「まあそう思う」の肯定的評価であったのは、DP 1・2・5・6 であった。一方、DP 8 では 33%が「まったく思わない」という回答であった。

表 3. DP1～8 の能力が就職先や進学先で活かされているか

		D1:主体的学修能力 n(%)	D2:課題解決能力 n(%)	D3:パートナーシップ n(%)	D4:地域医療連携能力 n(%)	D5:倫理的態度 n(%)	D6:教養・品格 n(%)	D7:メンバー・リーダーシップ n(%)	D8:国際的視野 n(%)
そう思う	卒2:28期	6(23.1)	7(26.9)	10(38.5)	5(19.2)	15(57.8)	15(57.8)	14(53.8)	3(11.5)
	卒1:29期	0(0.0)	2(22.2)	5(55.6)	0(0.0)	1(11.1)	5(55.6)	2(22.2)	0(0.0)
まあそう思う	卒2:28期	19(73.1)	18(69.2)	16(61.5)	21(80.8)	10(38.5)	11(42.3)	11(42.3)	11(42.3)
	卒1:29期	9(100.0)	7(77.8)	2(22.2)	7(77.8)	8(88.9)	4(44.4)	5(55.6)	4(44.4)
あまり思わない	卒2:28期	1(3.8)	1(3.8)	0(0.0)	0(0.0)	1(3.8)	0(0.0)	1(3.8)	11(42.3)
	卒1:29期	0(0.0)	0(0.0)	2(22.2)	2(22.2)	0(0.0)	0(0.0)	2(22.2)	2(22.2)
全く思わない	卒2:28期	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(3.8)
	卒1:29期	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(33.3)
平均値	卒2:28期	3.2	3.2	3.4	3.2	3.5	3.6	3.5	2.6
	卒1:29期	3.0	3.2	3.3	2.8	3.1	3.6	3.0	2.1

2) 2022 - 2024 年度の比較

卒業年次ごとに 2022 年度から 2024 年度の経年変化を図に示した（卒業 1 年目 Appendix B., 卒業 2 年目 Appendix C）.

過去 3 年間に於いて「そう思う」「まあそう思う」の肯定的評価の割合が 100%だったのは卒後 1 年目が DP 1, 5, 6, 卒後 2 年目が DP6 であった. DP4 は卒後 1 年目は年度毎に増減が見られるが, 卒後 2 年目においては肯定的評価の割合が上昇していた. D8 については低評価がありながらも, 卒後 2 年目においては年々上昇傾向が認められていた.

2. 卒業生の DP ごとの自由記載

表 4. DP1～8 の自由記載

※高評価：4「そう思う」3「まあそう思う」、低評価：2「あまり思わない」1「まったく思わない」

DP1 主体的学修能力		
	28 期生	29 期生
高評価	・ 新たな分野や看護技術などに触れるとき、 <u>自分から進んで学びたいと思える</u> ようになりました	・ 臨床の中で疑問を持ち、それを <u>自ら調べようとする姿勢が活かされた</u> と感じるため
低評価	記載なし	記載なし
DP2 課題解決能力		
	28 期生	29 期生
高評価	・ 学生時代の <u>知識を活かしながら自ら調べ学習ができていた</u> ため	・ 情報収集してアセスメントしてという一連の看護計画などは、今の仕事に役立っているから
低評価	記載なし	記載なし
DP3 パートナーシップ		
	28 期生	29 期生
高評価	記載なし	・ 勤務形態上、協力しながら実施する場面が多いため

低評価	記載なし	記載なし
DP4 地域医療連携能力		
	28 期生	29 期生
高評価	・ 急性期の病棟だけでなく <u>退院支援やその先の患者さんの生活を見据えた看護の視点が身に付きました</u>	
低評価	記載なし	・ 立場が下のため、あまり他職種と関わる機会はない
DP5 倫理的態度		
	28 期生	29 期生
高評価	記載なし	・ <u>忙しい中でも患者の尊厳を考えた行動を心がける場面が多い</u> ため
低評価	記載なし	記載なし
DP6 教養に裏付けられた品格		
	28 期生	29 期生
高評価	記載なし	・ 実習にあたっての <u>服装や礼儀</u> を学べたため ・ 言葉遣いなどを <u>臨床実習で学んだ経験</u> が活かされていた ため
低評価	記載なし	記載なし
DP7 メンバーシップ・リーダーシップ		
	28 期生	29 期生
高評価	・ 看護職だけでなく医師やリハビリ専門職などと情報共有し <u>チームとして患者さんと向き合う重要性</u> を感じています ・ <u>グループワークなどで 周囲と協力することで得られることを学ぶことができ、職場でも活かしている</u> と感じる	記載なし
低評価	記載なし	・ リーダー的役割を担う経験は少ないため
DP8 国際的視野		
	28 期生	29 期生
高評価	・ 外国人患者が多く適宜対応することができている	・ 外国人患者が多く入院する病院のため
低評価	・ 英語や国際分野への関心があまりなく、大学時代に学びを深められませんでした ・ 英語の知識などはあまりつけられなかった	記載なし

D. 看護学科で学んでよかったか

表5. 看護学科で学んでよかったか（4件法）

	28期生 n,(%)	29期生 n,(%)
そう思う	18(69.2)	6(66.7)
まあそう思う	8(30.8)	3(33.3)
あまり思わない	0(0.0)	0(0.0)
まったく思わない	0(0.0)	0(0.0)

表6. 看護学科で学んでよかったか（自由記載）

28期生	29期生
・ 看護学科で学んだ基礎的な知識や実習で得た経験は <u>臨床の現場でも自分の力になっている</u>と感じています ・ 慈恵出身の先生や先輩、同期も多いので <u>コミュニケーションが取りやすく仕事がしやすい</u>です！ ・ 講義、グループワーク、実習を通して <u>主体的に学ぶことができた</u>。また、先生方も <u>とても丁寧に行なったことに対してアドバイスをくださった</u>	・ <u>根拠を考える力が身についた</u>ため

E. 看護学科教育で継続すべきこと

表7. 看護学科教育で継続すべきこと（自由記載）

28期生	29期生
・ 実際の <u>臨床場面</u>を想定した少人数の演習 ・ KCL との <u>交換留学</u> ・ <u>関連図</u> はもっと書いておけば良かった	・ 記載なし

F. 看護学科教育で改善すべきこと

表8. 看護学科で改善すべきこと（自由記載）

28期生	29期生
・ <u>実習の記録の量</u> は今考えてもあれほど <u>必要無い</u>と思う。<u>タブレットを使用するなど工夫</u>が必要 ・ シーツを三角に畳む技術を臨床で使用した事は無い	・ 記載なし

3. 点検・評価と改善点

A. 点検・評価

卒後 1,2 年目全体の調査回収率は概ね 30%程度を維持していたが、卒年度毎のばらつきが見られた。DP を涵養する科目を充実させた 2019 年度カリキュラム改正により、看護学科の教育プログラムは卒業後に概ね高い割合で活かされていることが確認された。また、すべての卒業生が看護学科を卒業したことに満足していることは、本学科の教育プログラムに加え、大学や附属病院が一体となった教育体制も影響していると推察された。さらに、自由記載においても、学生時代に培った学修能力を活かし、臨床現場で医療専門職としての役割を発揮できている姿が伺われた。28 期生の卒年次変化は、臨床経験を重ねるごとに基礎的知識に加えて専門的知識が要求され、医療職としての役割が拡大していることが要因ではないかと推測された。

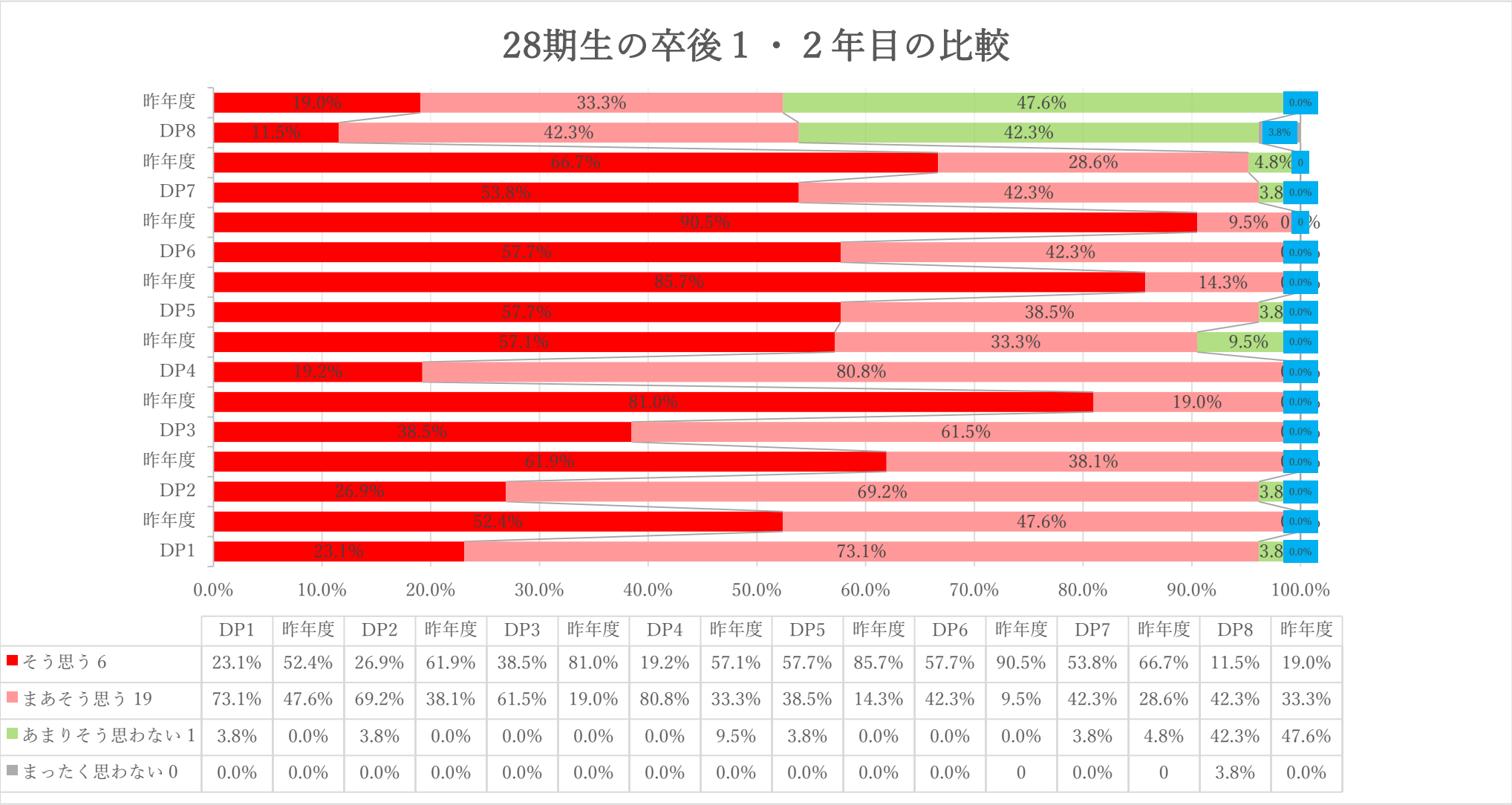
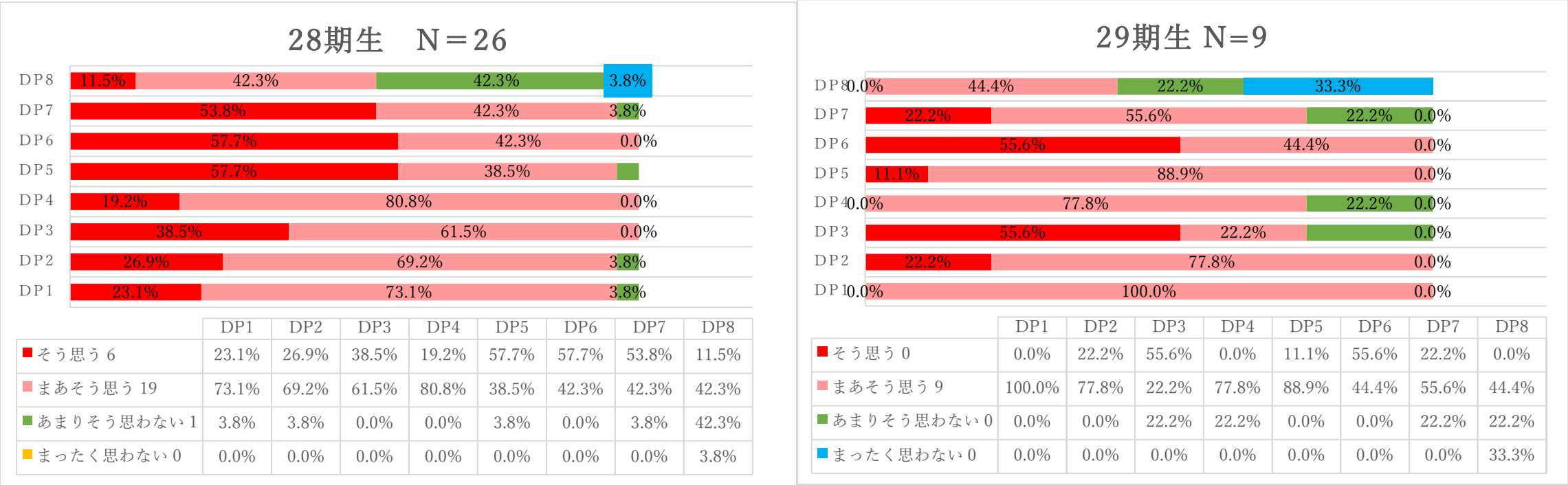
低評価であった DP 8 については、習得された能力を活かしきれる臨床に制限はあるものの、2022 年度と比較すると卒後 2 年目（2019 年度入学・2022 年度卒）については年々上昇傾向が認められていた。卒後 1 年目より 2 年目のほうが業務に余裕ができて、国際的な視野が広がっていた可能性が推察された。卒後 1 年目（2020 年度入学・2023 年度卒）において DP 8 が低評価だった要因として、Covid-19 のため 2020 年度から 2021 年度はシンガポール国立大学および国立台湾大学、Kings's College London との交流が中止されたこと、多くの学生が参加していた米国ポートランド研修も渡航を中止した学生であったことが挙げられる。また、同時期は社会の変化としても、国内における外国人旅行者等の数が減少していたことも関係した可能性がある。2024 年は、外国人旅行者がコロナ前よりも増加しており、生活や医療施設で接する機会も増えるため、今後関心の高い学生に転じる可能性がある。海外協定校においては 2022 年度からシンガポール、台湾、イギリスとの交流プログラムが開始され、2023 年度から米国ポートランド研修渡航が再開され 3 年生、4 年生が参加できている。さらに 2023 年度からは DP 8 を涵養する科目（Global Health and Nursing, Global Nursing Practice I, 研究方法論等）の開講時期の変更や講義内容の充実により国際的視野の強化が継続的になされており、今後の評価が期待される。

B. 改善点

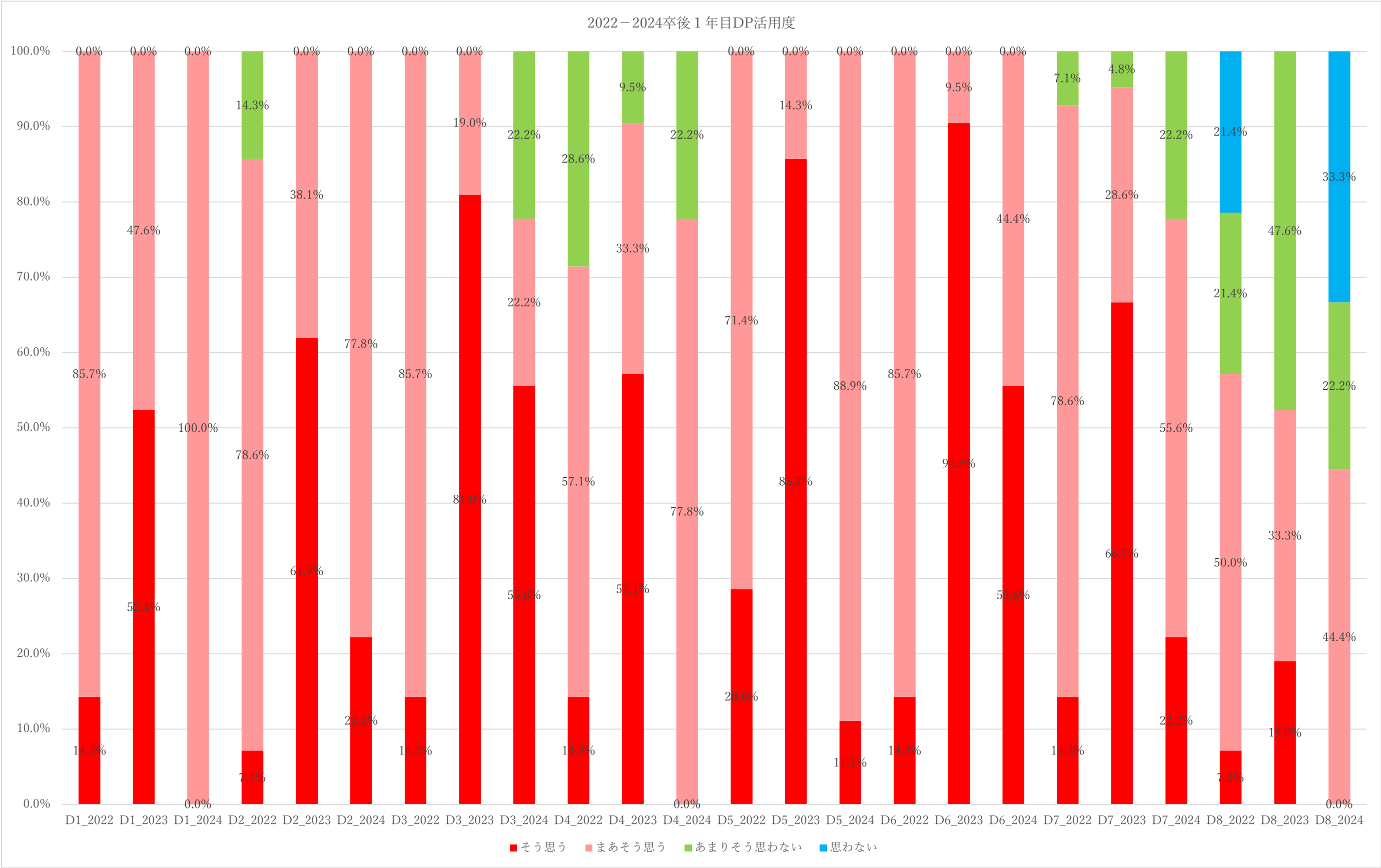
低評価であった DP 8 については、各科目において、学生が国際的な観点からも考えを深められるような仕掛けを組み込み、関心を高める工夫を行っていく必要がある。現在取り組んでいる d1 の他国の人々の健康問題に焦点をあてた看護職の取り組みと方法を理解しつつ、d2 の実用的な英語力とコミュニケーション能力が涵養できるような学修戦略においても、今後も継続して教育プログラムを充実させる必要がある。

調査回収率をさらに改善するために、現在の看護学科キャリアサポートステーションおよび学年 LINE にて調査依頼とアンケート URL を配信することに加え、ホームカミング・デイなどの対面による周知依頼をすることも検討していく必要がある。

Appendix A. 2024 年度 DP 1 ～ 8 の能力が就職先や進学先で活かされていたか



Appendix B. 2022-2024 卒後 1 年目 DP 活用度



Appendix C. 2022-2024 卒後 2 年目 DP 活用度

